

日本経済新聞夕刊 連載

あすへの話題 第七回

おねしょ

元世界銀行副総裁

シンクタンク・ソフィアバンク シニア・パートナー

西水美恵子

「残業は生産性が低い証拠」と、夫が仕事中毒ぎみだった私に示した結婚の条件は、退社時間6時。約束は厳守したが、例外があった。感謝祭の前日やクリスマス・イブと大晦日には、沈没寸前の船長だと夫に笑われながら職場を回った。寂しそうに残る部下を見つけると、もう帰ったらと話しかける。たいてい家庭問題など、悩みの相談話になる。泣き出す部下もいた。救済行為ではない。私生活が不幸では、よい仕事は期待できない。心底そう信じたから。

ある小学生にそれを教わった。元気がなくなった部下に理由を聞くと、息子の成績が下がり、海外出張の度に寝小便をすると言う。勘で「出張に連れて行ったらいい」と補助金を出した。忘れた頃、その子から「出張報告書」が届いた。「母が飛行機で飛び立った後のことが解って嬉しい。母はインドの貧しい人を助けている。僕みたいな子が学校へ行けるように立派な仕事をしている。母を誇りに思う。僕も母のようになりたいから、一生懸命勉強します」。幼い文字を辿りながら、溢れる涙が止まらなかった。もちろん、おねしよはぴたりと止まり、成績は親子揃ってうなぎ登り。部下に明るい笑顔が戻った。

恥ずかしかった。人は職場でも家庭でも同じ人間。どちらかで不幸せならもう一方に響く。こんな簡単なことが解っていなかった。以来、給与体系から出張規則や産休制度などまで、人事全てに職員のみを対象とする思考を捨てた。部下の家庭を対象に、人間としての幸せを考えるようになった。

減らない労働時間、増える自殺、未成年の凶悪犯罪、人口減少…。そして女性の労働力に目覚めた日本。そんな母国を憂う今日この頃、あの子の報告書を書き出す。

## 著者紹介

西水 美恵子（ にしみず みえこ ）

1975年、米ジョンズ・ホプキンス大学大学院博士課程修了後、プリンストン大学助教授（経済学）。80年に世界銀行入行。97年、南アジア地域担当副総裁に就任。2003年に退職。現在は独立行政法人経済産業研究所コンサルティングフェロー。07年に、シンクタンク・ソフィアバンク シニア・パートナー就任。著書に『貧困に立ち向かう仕事』。

著者へのご意見やご感想は、下記アドレスにお送りください。  
個人メールアドレス [nishimizu@sophiabank.co.jp](mailto:nishimizu@sophiabank.co.jp)

本稿は、西水美恵子氏が、二〇〇六年八月十二日付の日本経済新聞夕刊に、寄稿したものです。

著作権は、著者に帰属しますが、配布は自由に行っていただけます。